

関東の繊維産業は、江戸時代から農村地域に広く展開し、繊維原料の生産から原糸・織布にいたる工程を包括しつつ各地域にそれぞれ特産地を形成してきた。特産地の多くは、原料産地、すなわち養蚕・綿花・大麻などの産地にそれぞれ生糸―絹織物・実綿―綿糸―綿織物・麻糸―麻織物などが成立していた。しかし、明治期以降の近代工業発展の過程で原料輸入や輸出製品の増大、加工技術の機械化が進行し、関東繊維産地に大きな変容が出現したのである。

本発表は、このような変容過程の中から、綿織物業の変化を北埼玉を中心に、明治期から現在までを追跡し、地域変容の実態とその原因について論述したものである。

発表者らは、関東全域について、実綿生産の地域と、綿製品地域の結合から分離の時期を明治三〇年代までに終了し、多くの産地が養蚕産地へと転換していることを指摘し、しかし、北埼玉においては後年まで実綿生産が続けられたことに注目している。そして、こうした現象の原因として、北埼玉が太番手糸使用の青縞生産地であり、行田足袋産地に近接していたことをあげている。つまり、技術的立ちおくれが、特殊織物の存在に支えられて残存し、さらに地元織物問屋の資本の特殊性と相俟って存在を可能にしたものと考えられている。こうした結論を導き出す分析過程は、かなり精緻にくみみたられ、非常に面白い研究である。

発表後の討論においては、「実綿分布と青縞の藍の分布及びその消長の関係」（山崎）、「買継商（小島商店）の青縞買入れ先の分布図（発表時の配布資料）について」（中田）、「残存した青縞生産業者のその後について」（松村）などの質問があったが、大方論旨に

ついては賛同された。

ただ、多少評者のコメントを述べるならば、関東全域の繊維産地のマクロな研究としては、日本の資本主義発達との関係において、資本や技術の問題を変容の問題とすることも出来るし、たしかに大きく作用しているだろうが、北埼玉の綿作と綿織物業地域の変容として、ミクロな地域問題として考える際には、地域それ自身のインテンシブな調査の中から、地域サイドの要因が考えられるべきであろうと思う。例えば、労働力、農家の土地利用や所得の問題、地域の特性など、残存地域と消滅地域の比較などが論じられればよかったと思う。こうした点については「工業間の変容だけでなく、農業・商業との関連をも考え、社会的側面からの検討を加える必要がある」（田村）というコメントによって代表されている。

しかし、先にもふれたように、本発表は発表者らが継続的研究の一端として今回の発表を行ったものと考えれば、次回、次々と続く研究の成果として期待したいところである。（井出策夫）

## 〔書評〕

籠瀬良明著 自然堤防―河岸平野の事例研究

一読して、これは地図の本だといってもよいのではないかと思っただ。いかなれば、地図―大縮尺の地形図の使い方の本なのだ。

書名のごとく、本書の目的は、自然堤防という地理的事象の解明にあり、もとより「地図」の書物ではないのであるが、自然堤防といっても、その後背湿地を軸とした河岸平野の性格究明のための

便法として、地図利用のいくつかを紹介したものともみることができ、地域解明にいかにも地図が利用されるかという、これはまことに確かな好例をいくつもみせてくれる点で、はからずも地図の本だと考えたしだいである。

著者は国土基本図が好きだという。著者の地図に対する愛着と地域研究に対する熱意とは、平生、著者を知るものにとっては、頭の下がる思いをするばかりであるが、著者はまた国土基本図のみならず、五万分一や二万五千分一の地形図なども実によく利用している。このように、著者は地図の利点をいかして手際よくまとめる才能と手腕をもつ人であるが、本書でもこの才能と手腕はいたるところで発揮されている。もっともこれは、本書だけではなく著者の前著「低湿地」

でも共同編集の「扇状地」でも同様であるが、とくに本書は地形図や国土基本図や空中写真の利用をふんだんに盛りこんだ成果として、一種の地図利用模範集ともいえるべき性格をもっているといえよう。

この観点からみると、というよりも、こういう観方をさせる理由は、要するにそれがこの書の大きな特徴の一つであるが、地図を十分に使って地域現象を多様に表現していることである。巻頭に例題として挙げた地域の一覧図が挿入されているのなどは、まさに本書が地図表現による地域解明を旨にしていることのあらわれである。

本書は、書例研究を全国各地に求め、自然堤防という地理的実体を地誌風に解説する。その構成は序章に自然堤防の諸側面を置いて、そこでまず自然堤防のプロファイルを概観し、次に第一章から第五章まで北海道・東北地方から中国・四国・九州地方にわたって、いくつかの事例を提示する。最後に終章として回顧と展望をもって終る。

序章では、自然堤防調査における大縮尺地図の効用について記述し、この種の地図の使い方が述べられている。同時に、河川横断面図とか浸水区域図とか、土地利用図・土地条件図・水害地形分類図・地質図・地籍図・土地台帳などを資料とすることの必要性が強調される。そうして、こうした地図と現地調査によって明かにされる自然堤防の地形とその特質が、著者作成の数多くの地図によって提示される。それを著者は冒頭で「自然堤防の形態を讀者、とくに同種の土地に精通した人たちの前に、なるべく文章を短くするとともに、自作の未熟な地形区分図よりは、なまに近い状態の大型地図をせいぜい縮小するだけにとどめて、できるだけ多くを盛り込もうとした」と表現している。

著者の立場は、土地現象を自然と人文との融合の上に見出そうとし、歴史の痕跡によってそれを裏づけようとする。そこに歴史地理的考察の導入されるゆえんがあるが、それは古文書による解明の立場ではなく、あくまでも土地に印せられた実際の痕跡に依存するものである。文書に頼る面といえば、土地の姿を直接的に表現する地図があるだけである。それだけに、地図はその研究の根源であり、成果でもある。著者にとって地図は真理であり、真理は地図から生れる。それゆえにこそ地図の誤りの発見は、かえって地図の有効性を高めるのであろう。

著者はこの本を問題提起の書とする。著者のエネルギーなあくなき探求は、従来研究のおくれていた自然堤防の総合的な易扶にいくたの解明を与えているが、説明に必ずしも解決された形でケリをつけてはいない。読者のみならず著者にとっても、不明の箇所が

存在すると感じられる点もあるが、それは研究というものの常、それもまた当然といえる。問題提起とは、それはそれとして未解決のまま問題をなげかけたことを自らいうのであるが、問題提起のまま、いつの日、帰趨いずくにあるかを、ふと思うのも、評者わが身の怠慢にてらしただけの杞憂であろう。

最後に、評者はこの本を通読して、大縮尺地図について次のように思う。

自然堤防という微地形は、国土基本図のような大縮尺図か拡大された空中写真などの土地情報資料を駆使しないと、十分な調査研究の効果を挙げるができない。国土基本図は、現在五千分一が主力であるが、一部にある二千五百分一の縮尺図の増加することが、微地形研究にとっては必要とならう。等高線間隔は、五千分一の場合の五〇センチメートルでは微地形の詳細を表現することは困難で、やはり二千五百分一の二五センチメートル間隔が必要である、と。これには著者も同様の見解を示すであろう。

昭和五〇年一〇月一日 古今書院刊 A.5.版 三〇六頁  
三五〇〇円。(山口 恵 一郎)

おしらせとお願ひ

①新入会員(入会順)

樋口政則(一〇六) 東京都港区南麻布

三一四―一四

柴奥謙吾(奈良大学生)(七〇九―〇八) 岡山県赤磐郡瀬戸町江

尻一七八二

宮沢正美(足立区立一六中)(二二一) 東京都足立区西保木間

二一三一―一四〇一

②住所・住居表示・勤務先変更

青山剛征(聖園女学院)(二二〇) 川崎市昭和二―三―八

前田正名(立正大)(三五二) 埼玉県新座市野火止五丁目二六番

一号

小沢利雄(東邦大付属高)(二七五) 千葉県習志野市藤崎四丁目

二〇一八

魚住明信( ) (五九〇) 大阪府堺市宿院東三―三四

矢野重文(京大大学生)(六〇六) 京都市左京区吉田二本松町

一〇 田中与一方

天井勝海(都立三田高)(二五三) 神奈川県茅ヶ崎市鶴ガ台

九一七―四〇五

平岡昭利(関西大学生)(五六四) 大阪府吹田市垂水町二丁目

一五一―一六前田方

内田実(札幌大)(〇六一―一二) 北海道札幌都広島町大曲

四七八―九〇

根本広行(茨城高)(三一〇) 水戸市新原一丁目二二―九

内山幸久(香川大)(七六一―〇一) 香川県木田郡牟礼町牟礼

一四四〇牟礼公務員住宅六一―一

寄贈文献( ) ( ) 内は本会会員の執筆によるもの

〇「地理」二〇巻八号 古今書院 (織田武雄「立石の漁村」、籠

瀬良明「隆起砂州上の潮来」、板倉勝高「引佐町」、上野和章「紬